

リチャード・F・フリードマン著『神の消失』を巡って ——延原ゼミ05年度後期まとめレポート

03K043 尾身 拓夢

私たちは今回、リチャード・F・フリードマンによって書かれた『神の消失』という書物を主軸にゼミを進めてきた。この書物は、キリスト教の教典である旧約聖書に描かれている“神の消失”、ニーチェなどからみる“無神論”、そして科学的論点から見る“有神論の再生”を主に取り扱っており、いずれも神の存在、不在を扱っている。これらは私たち、人間にとって、興味の惹かれる分野であり、必要であり、且つ重要である。人間には対局して二通りの人間がいると考える。神を信じる者と、科学を信じる者の二通りである。この二者には大きな隔りがあることは言うまでもない。ここで言う二者には、極端な神信仰者と科学信奉者だけではなく両者共に信じると言う人も含まれているが、極端な見方をして読んでいったほうがより解りやすいかと思われる。ただ、フリードマン自身が神学者であることを先に述べておく。つまり「神はいない」と言う前提で読み進めようとするこの本は読めないことを注意されたい。

フリードマンは先にあげた、“神の消失”、“無神論”、“有神論の再生”の三つの疑問を、“三つの謎”と題して、一つの謎について数章ずつにわたって解き明かしていく。それでは、私もフリードマンに習って、“第一の謎”から解き明かしていこう。

“第一の謎”は旧約聖書に描かれる“神の消失”である。もっとわかりやすい言葉を使うならば、“神というキャラクターの消失”と言って良いだろう。旧約聖書の第一章とも言うべき存在は「創世記」である。創世記では神がまさしく、世を創っていくところから始まる。そこには、神は初めから存在している。そして、神は世界を創ったあと、自分に似せて、アダムを創り、そして彼の肋骨からイブを創る。神はアダムとイブを楽園に住まわせていたが、蛇の入れ知恵により、アダムとイブは、神との約束を破り、楽園を追放される。しかし、その後も、神と人のつながりは濃厚である。神はアベルとカインと会話し、世界の全ての人を滅ぼし誠実なノアを助け、モーセ、アブラハムなど、様々な人間と神は相対し、会話し、討論し、時には相撲までとった。

しかし、時代が進むにつれて神というキャラクターは少しずつ少しずつ、物語に顔を出さなくなっていく。旧約聖書の初めの頃は、人間の誕生や、行動、発言が取り沙汰されてはいるものの、旧約聖書での最初の主人公は神以外にはいない。しかし人間の人格が構築されていくに連れて（神と対等に会話したり、交渉したりすることを通じて）神から人間が、離れていく。申命記では人間が王制を創る際、人間が神から離れることの懸念が如実に現れており、それを避けるために「王に関する規定」が用いられた。しかし、人間は神から次第に離れていく。ついに神はイスラエル第三の王ソロモンに語りかけたのを最後に、人々の前から姿を消す。

これは人間というキャラクターが濃くなっていくにつれて主人公の交代が起こったことを示しているといわれて良いだろう。たしかに、神は人間を創り、人間もそれを信じていた。しかしながら、それは、経験として神を知っていることと、感覚的に神を信じているということでは意味合いが大きく違う。そして、大地を人間

が支配すると、人々がいかに生きるかが問題になり、また自らでそれを解決する力を身につけたことによって、預言者らの力の介在があったとしても、神自身が出現する必要性が失われたのである。人間は人間自身での自律が可能になったことで、神を“信じてはいる”ものの、“知らない存在”になったのである。

そして、これは“第二の謎”へとつながっていく。神が消えて二千年以上経った現在、「神の死」という表現が一般化し、事実、神を経験した人は皆無に近い。では、「神の死」という表現はなぜ表面化しているのか。それはフリードリヒ・ニーチェという人物の生涯がそれを教えてくれる。

彼はドイツのナショナリズムを批判していたものの、「ツァラストラ（ゾロアスター教徒）はかく語りき」という著書により一般にはナチスの先駆者として見られていた。彼は謙虚とはいえない性格ながらも類まれなる頭脳を持ち、異常なまでの感受性と精神が一体化した才気であった。しかし、彼は容赦ない肉体的精神的苦しみにさいなまれ続け、そして、発狂した。

1889年1月初め、トリノの通りを歩いていたニーチェは馬に鞭を振るう御者を目にし、その馬に走りよって、その首を抱きしめたまま、意識を失い、正気に戻ることはなかった。その後の彼は自らと神を混同させるような書簡を何通か書いている。

この“二つ目の謎”には「罪と罰」のドストエフスキーが絡んでいる。しかしながら彼ら二人は一度もであったことがない。にも拘らず、多くの共通点が見られる。二人共に神の死という考えを持つと共に、「全て許される」という考えの発展。二人を結びつけた著書に登場する「地下室」と言うキーワード。そしてニーチェ自身の予知夢のような悪夢、そして愛する女性に振り向いてもらえない孤独、その女性の手にした鞭、馬の役のニーチェ、そして彼女が乗る馬車。それらは複雑に絡み合い、ニーチェを追い詰めていた。そして、その不可思議な連鎖がついに偶然ではなく一つの形をなし目の前で形象化された。それが、御者が馬に鞭を振るう光景だったのである。彼はその光景をまるで自らが打たれているかのように、錯覚し、彼の不思議極まりない人生のその全てがそのことに集約され彼の自我を崩壊させていく。彼は牧師の子でありながらも、その天才的頭脳と精神で、自ら神がないことをこの世界に宣告した。そして彼は発狂する寸前、「あらゆる価値観の再評価」によって、「人類の歴史は二分され、私にはそれをするだけの力がある」と述べていたと言う。

“第三の謎”は宇宙論である。科学が進歩するにつれ、神といわれる存在が果たして本当に存在するのか、という疑問が強く浮上してくる（あるいは神という存在を否定したいがために研究するのかもしれない）。科学者たちは近年、まるで神学者のような物言いをすることが多い。それは、人間の科学の力の限界、つまり科学の飽和状態に近いことを表していると言っても良い。現存する科学の力は新たな発見がされるまで、その先を見ることはかなわない。天文学などは特に古代、中世では、神と密接にかかわるものであったために、地動説が有力視されていたこともあった。しかしながら近代にはいっていくにつれ、科学の力が急速に伸びていくにつれ、そして、人々の精神が無神論に傾いていた時勢も影響し、無神論者があふれ出した。なぜなら、科学の力を用いれば、人間が自らの手で様々なことを解決できる。神の介入がなくても多くの不安を取り除くことが出来たからだ。つまり科学の中に神はいなかったのだ。

だが、彼らは壁に当たる。今回この書物ではビッグバン理論を主眼にすえているので、それに従うが、科学で解明しようと試みるうちに、まるで、そこに神が隠れているかのように、解決しえない問題が多く出てきたのである。

ビッグバン理論はアインシュタインの一般相対性理論の構築により、予想されていたものであったが、19

29年ついにハッブルが宇宙の膨張を実際に観測したのである。宇宙の膨張の以前は、限りなく小さくならなければならない、と言う推論に達し、ある点が何かの原因で爆発し、星、石、生物となっていく。そして、程なくして、それを証明する宇宙背景放射を観測。続いて、星雲などの形成に必要な波動も発見され、ビッグバン理論は定説として定着した。

そして、意外なことに、このビッグバン理論とそっくりな思想が、ユダヤ教の神秘思想のさす言葉カバラの中にあり、そのカバラはラビの時代から存在しているもので、多種多様な隠喩を用い、非常に難しい概念が用いられている。

カバラの中心問題は宇宙の創造であり、特に神の本質とは切り離せない。カバラの始祖ゲルシユムは「創造の根本的事実は神の中で起きる……世界の創造、即ち無からの創造は、それ自体、神自身に起こることの外面的特徴に過ぎない」と言っている。カバラの教義では、創造の前に神は一点に凝縮し、その一点がある一瞬に爆発して、十の発散物（セフィーロート）の集まりが出来たのだという。そして、セフィーロートは人が知る全てのものを含んでおり、神の性格即ち人が出来る神の側面を表している。

全ての物質が宇宙の発散物の凝縮によって出来ているなら、神の何らかの要素がどんなものにも残っている。それはテキストでは、皮のぶどう酒入れが何度洗ってもぶどう酒の香りがするように、「神の香り」が残っており、持続している。「あらゆるものに神の現れの名残がある」という。カバラは一点から始まった宇宙を語っている。その点が膨張を始める瞬間があった。その膨張によって我々が知る形の宇宙ができ、最初の出来事が持続して、宇宙全体に広がっている。そして、それはビッグバン理論と酷似し、さらにその先、つまりビッグバンの前に何があったのか、それはカバラでも、「その点から先は何もわからない」とされ、科学者の間でも、それを解決できてはいない。しかし、科学を凝視することで、神が見え、神を凝視していくと、そこに科学が介入できる。

つまり、科学と神学に共通点が存在するのである。科学を信奉する人は「まさか」と疑い、神を信仰する人は「科学では解明できない」という。しかし、そこには確かに共通点があった。神という絶対者が存在しなくとも、何かの働きかけが宇宙全体を不均一にしたのだから。

(レポート指導教員 延原 時行)